

時代の煩悶——藤村操「巖頭之感」の周辺(下)

「淋しきの極みに堪て天地に寄する命をつくくと思ふ」

左千夫

高橋 新太郎

三

長篇『被戒』の筆を進めつつあった島崎藤村は、明治三十七年十二月の『新小説』誌上に短篇『津軽海峡』を発表した。息子に厭世自殺された中年の夫婦の、悲しみを總す北海道への旅の、『津軽海峡』でのことどもを主材とした小説である。

飽くことを知らない仲のやうな精神はありとあらゆる是世の事業と荒業と盛衰とを嘆きかねて、人世といふもの、意味を窮めずには居られなかつたのです。飛んだ量見遠ひの大鏡輝と物見高い人々には睨ませて置いて、いふに言はれぬ悲歎を懐中しながら、黙つて現世を去る時の其心地はどんなでしたらうか。思想上の絶望——といふことが、彼様な青年の一生にも言へるものなら、それは確に細い深い深い最後でせう。凡夫のかなしき、学問して反つて無学といふことを知りましたのが仲の不幸でした。噫、仲は学問を捨てたのです。学問もまた仲を捨てたのです。朝顔日光へ出かけて行つて、崖の流へ落ちて死にました。……………

「父」の視点から「語られて」いるこの作品には、前年五月の藤村操事件が作因に関わっていると見てよからう。そして藤村操の自死に対する作者藤村の理解のありよともそこに示されている。

北村透谷と藤村操に通底する厭世観の根源に「一つの大きな影響」を及ぼしたものととしてバイロンの劇詩『マンフレッド』を擬した論に剣持武彦の『藤村詩集』序と『巖頭之感』がある。近代的自我の煩悶を身を以て休した透

谷の『マンフレッド』への深い其鳴は、よく知られているが、この『ハムレット』第一幕第五場の一節を冒頭にかかげ、「天運の無限の神秘に対する驚きの感情と、人間の内面の世界の不思議さに対する深い衝撃と、その外と内が一つになった自我という存在への追究」飽くことを知らない精神」を主題とする作品の反映を、「巖頭之感」に見ると同一視している」所説に異を唱え、「むしろ『マンフレッド』の最後と藤村操の死を、その「悠然とした態度」という点において、藤村操の場合は自然の悠久のなかに自らを同化させようとする仏教的な世界観である」とし、藤村が「傑作『巖頭之感』に表白された飽くことを知らぬ精神——それは現代ふうにいえば純粋精神といってもいい——による」と説く。更に明治三十七年九月四日発行の『藤村詩集』の「序」の一節「また思へ、近代の悲劇と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。」に、北村透谷や島崎藤村の狂死を遂げた先輩詩人中西梅花を指摘する従来の諸説が、「生々しい事件であつた藤村操の問題」を考えあわせられなかった「片手落ち」を指摘している。

先に、野上豊一郎の回想を通して、「高生藤村操が『ハムレット』を持ち歩いてゐた」エピソードを記したが、自死した年の一月二十九日の心友南木性海に宛てた書簡にもその愛読ぶりがうかがえる。

……君の遺筆は大に其時を得て居つた様である、何となれば、僕は今や高上の哲理等よりは寧ろ実践論理に於て然ししながら僕思ふに親しく接しなければ如何なる偉人とても到底究究の感化を爲ふことは不可能である、で僕はクラテスよりは寧ろ君南木君に望む所甚だ多いのである。イムプレッションを与ふる唯一の鎖は、プラトニツクのラブである、而して此ラブや到底タイムを異にした人物間に求め得られない、假令クセノフオンの筆如何に巧なりとらうか此頃大に感情的に成つて、理屈張つた事がいやになつた、こんな事では大變だと思つて能ふ限り理性の光を障明しやうと思つて居るが中々六ヶしい、しかし、現時の道学先生や学究の様に、頭が冷かに堅まつて石の様に成るのも宜めた事でもないと思つて自ら弁護してゐる、デントンの註のシェークスピアの

『ハムレット』、それから早稲田の真木子撰評註のものである……ドゥも漢文の力がなくて仏書が読みたたくても読んで困る。……………(略)。

斎藤栄に『日本のハムレットの秘密』(昭和48・8、講談社、50・4(ロマンブックス))の著がある。著者は、昭和四十一年に『殺人の棋譜』で江戸川乱歩賞を受けた推理小説界の中堅で、『奥の細道殺人事件』『海の碑』などの秀作で知られる。この作品は、藤村操の華嚴の滝自死から七十年を経て、推理作家である私が、神田の古木屋で『華嚴唯心義釈』なる本を、裏表紙に押された「藤村蔵書」なる印に魅かれて購つたことに始まる。無論、藤村操の自死が偽装と速断した故である。藤村操は「私の母の父」だと称する「みさを」という若い女性の出現から、藤村操の自死が偽装だったのではないかという疑惑を深める。なぜ藤村操は偽装をこころみたのか、どこへ隠れ住んだのかなど、暗号解説を含みつつ推理が展開されてゆく。事件当時の新聞記事や山名正太郎の『自殺について』、安倍能成『我が生ひ立ち』などが援用消化されている。

藤村操と一高で親交、明治三十六年八月二十五日、先行の那珂博士一行と日光で合流し遺体捜索にも加わつた藤村正は、後年、事件の委細を記した「藤村操君投瀑前後記」(『叢書』昭8・4・5)で「巖頭之感や、遺書や、遺物の点からみると、どうしても死体が滝壺の中か近所に無くてはならない筈であるのに、いくら捜しても見当らない。数日に亘る大捜索も無効に了つた。しかし三月たつて七月三日の午後に偶然下流で発見された」と書いているが、もし死身が五月二十二日とすれば、四十二日後に発見されたことになる。斎藤も引用しているように、安倍の『我が生ひ立ち』には、「藤村の死骸は中々見つからず、その間にも華嚴の滝への投身は一時の盛んな流行となつて、日光町の多大な迷惑になった。彼の死骸の流壺に見つかったのは、彼の死後六十日も立ってからであり、……藤村の死体を見た時には、もう眉目もさだかでなく、陰惨の情に堪へなかつた。これより先瀑辺に記念の碑を建てるといふ企も、那珂さん等によって企画されたが、その後投瀑者の続出によって、それもお流れになつて」しまつたとの記述がある。斎藤の作は、藤村操を模倣する投身者の相次ぐ状況下で眉目もさだかでない腐爛した遺体を確認することの困難さから、誤認の可能性を引き出し推理を進めたものである。

藤村操生存説は、遺体がなかなか発見されなかつたところから当初よりあり、「操の書簡」(『東京朝日新聞』明治40・

『大正2・7、岡村書店』『生存せる藤村操』(大正5・7、天祥社)などの作も生み出されてゆく。

「操の青筒」は、平木白星の『操の青筒』を掲ぐるに「きて」によれば、「客年十月の頃、藤村操なる氏名を以て、我に宛たる青筒を致し来るものありき、最初には何人かの好事なるべしとて、……一読過の後何処へか投棄して、顧みざりしなり、……其後第三信を手にするに及び、稍や思ひ感ふ所あり、……第四信第五信の到着するに遇ひて、一種の興味と了解とを生じ爾來一々これを保存して、今や第八信を得るに至りぬ。……不思議は不思議とし、左に右『藤村操』なる假名を有する人よりの青筒として、少しくこれに筆を加へて公表したもので、平木宛の青筒の封筒に付された郵便局の消印は、常に下野足尾とあった。第四信には次のごとくある。

死したる余に何の祖先か候べき、何の情交か候べき、恩恵が何ぞや、義務が何ぞや、何の法律か道徳がある、何の毀譽褒貶がある、王者の統、文明の盛、我に於て何かある、擬天凌穹をも引みて得べき自由とは、死したる我の上にこそあれ、死したる我にこの自由を檢束すべき何の神仏主権か候べき。死を怖るゝは自家意識の尽誠を恐るゝにあるか、自家意識の有無、何ぞ永劫的意義の有無と関せんや。真理は神と共に永遠にて候。……死は我ならぬ我を、我に代つて世に生ぜしむる機会なれば、我死せずば「我ならぬ我」「新らしき我」は生くる事あらざるべく候。我は新らしき我を愛し、そを愛するが故に死をも愛す、愛を知るが故に死し、愛の極なるを以て死を受するにて候。

釈宗演なりしか余に語りし事あり曰く「故木竜吟し鎮して未だ枯れず」と、即ち何物か死後に残るを信するに依る。死の片身を「愛」と名づく。貴意如何。……

「操の青筒」は、第七信の發載をもつて中止されたが、次の藤村操の著とうたった『類聞記』は、明治四〇年五月二四日付で「安寧秩序紊亂」の罪で發禁禁止処分を受けた。編者若木無籍の「木書原稿の由来」によれば、藤村操の談じた所見を親しき知己がノートに書き止め、それに藤村操自身が加筆した草稿の写しで、楠木唯在なる青年が金策の形に置いていったものという。

幾度か自殺を試みるもついに果せず北海道に向かい、そこで敵人の海賊船に拾われ、諸國に廻航して北極に到った藤村操が、「自己の達した思想心法を故國の知己に托して」公開しようとしたものである。これが發禁になつたについては、B5判一二三頁に及ぶ近代日本の發禁本大特集を編んだ『浪速書林古書目録』(第10号、昭55・12)の解説にあるような「一高生藤村操が、実は日光山中に存命して木書を執筆したという假装の手段が世人を迷わすと、治安上から嚴禁された」のもあろうが、より大きな理由は、「操」の吐露する次のような獨特の「盜賊哲学」の主張によるものではなかつたか。

……官吏は社会制度の名によりて、罪人と假稱せらるゝ人類を斬る、軍人は國家てふ名によりて、別地の人間を斬る、強盜は邪悪者の名によりて、物貨の所有者を斬る、甲地人は乙地人を軍事探偵の名によりて斬る、木夫は姦婦姦夫の名によりて、情酌合意せる二つの人間を斬る、仏蘭西國民は人民の名によりて、天皇と名付けられたるルイ十四世てふ人間を斬りたるは何ぞ。

見ずや、何人によりて如何に命名せらるゝと雖も、殺人は依然として殺人なり、若し殺人てふ字にして斯くて悪なりとせば、其の行為は悉くこれ悪なり、然るに社会の一時代はそを牽強付会して之れを正邪に判別す、借問す、誰れか鳥の雌雄を知る者ぞ

社会に私有制度あり、其の保護法も亦是れあり、之れ恰も水の停滯に異ならず、見よ其の私有は新陳代謝せざる水にして、保護法は則ち流通を齟齬する堤防にあらずや、若し水を停滯せしめて子湧く勿れと言ふものあらば、誰れかよく笑はざらんや、若し私有制度を存して盜む勿れと謂ふ者あらば、誰か亦笑はざるを得んや、夫れ私有があるが故に盜賊生ず、盜賊あるが故に私有生じ保護法生ぜしにあらば、されば盜賊を憎悪し、絶滅せしめんとせば、宜しく先づ圍圀を作り縞衣を縫ふに前らて、私有制度を廢し、一切機關を公有にし、共同社会を現出するに勉めよ、然らば盜賊は自然に消滅せん

全世界に散在せる各種の社会を以て、之れを一個純白なるカーテンとせば、上流人士、政治家、資本家、借問學者は將に其の汚点なり、純白なる社会は彼等によりて毎に混濁せられつゝありと謂ひ得るなり、全世界に点在せる一

切の社会を目して、之れを一箇暗黒なる巨幕とせば、盜賊は、將に其の黒暗々面に点せる、燦たる紋様なり、瘴天に星を點むが如くなり、

大別せば人は社会を二層に解釈せるに似たり、一は社会を純白善美なるものとし、一は社会を黒暗なる伏魔場裡となす、之れを純白善美と稱する人は盜賊を汚点となし、之れを伏魔場裡と稱する人は政治家、学者、官吏、資本家を汚点となす、

而して前者は具社会を欠陥なき文明の舞台と思ふ、故に彼等は曲学阿世只筆墨付会これ事と爲す学者を目して人生の秘機を開示する一箇偉大なる第二の造化者となす、故に彼等は多衆人類を目に見えざる細縛もて毎に絞殺せんとしつゝある資本家を目して、これ人類間必須の生産配置者となす、故に彼等は純朴なる同胞を擲論し其背血を以て生活官吏を目して、人類進化の先達となす、故に彼等は人類を蔑視して人間以上の態度を執り、多衆の寄生虫たるり来たり、殺人犯の多きは社会の制裁其の誘導者たりと爲し、上流人士、官吏、政治家、資本家、学者は之れ悉く隠なる人、姑息なる人、潜悪なる人、狐の如き人、編織の如き人と解し、而して盜賊の発生を當然となす、

是はれ、解釈断案は其の起て来る無きはあらず、予は少しく其衝突の生ずる源を見んと欲す、

見ずや、社会の闘争衝突、之れ果して何が故にしかく闘争し衝突するや、即ち一は新思想によりて凡てを爲さんとし、一は即ち旧思想によりて事を遂行せんとするが故にあらざして抑も何ぞ、

其の純白善美となすものは、直ちに封建時代を引例して具社会を諷刺す、其の伏魔場裡となすものは理想を引例し

て具社会を破壊せんとす、
即ち一は昨日よりは今日を良しとし、一は即ち、明日よりは今日を悪しきとなす、是れ而已、只夫れ是れ而已……

(七十五)

《神聖不可侵》の天皇神格化を推し進めていた元老山県有朋が、明治四十年、渡来中の帝大教授高橋作衛から屈いた在米社会主義者の激文「日本皇帝陸仁君ニ与フ」を手にして過敏、過刺に天皇制への危機感をつのらせ、やがてあの「幸徳事件」のフレイムアップを生むに至る政府に、厳しい対応策を迫る時代状況の文脈の中で、前記の「仏蘭西

国民は人民の名によりて、天皇と名付けられたるルイ十四世てふ人間を斬りたる」「私有制度を廢し、一切機關を公有にし、共同社会を現出するに勉めよ」等々の文字は読まざるべきであらう。

敵頭の人(山路赤春)著『敵頭の告白』は、今は、高尾山麓の荒寺の住職となつて瞑想の生活を送つてゐる清原操の物語で、平塚文学博士の家に書生となつて第一高等学校に籍を置く操に、博士の娘君子と山川代議士の令嬢房子の恋をからませ、華嚴敵頭から身を投げた操が断崖の藤蔭に支えられて命をとり止め、名を變えて缺夫に身を隠し、鐘山暴動に参画することなどをおりこんだ家庭小説仕立ての作品である。山川は、横暴な権内閣を互解に追いこみ、憲政の神として名声を博する代議士との設定である。

匿名子著『生存せる藤村操』は、「僕」が「先生」の仲介で、今は東京で「立ん坊」を業として生きてゐる藤村操に会い、その女性観、労働観、人生観等をきき出すというもので、投身自殺に失敗した操が世間に顔が出せず流浪の身となり、足尾銅山の坑夫となつたりしたが、「明治天皇陛下」の「御大葬が押したいばかりに」東京に出できて、車の後押しをする「立ん坊」を業として自由な境界を樂しむ感情がのべられている。例えば彼の職業観は次の如くである。

今日の学校教育では、決して車挽きや車力になれとは教へて居ない。かゝる教育を受けた人間から見れば、立ん坊の如きは卑賤な無意識な人間であり、生活であるに相違はない。然し乍ら、自分からこれを見ると、今の自分の此の南光は実に己れを知つて、己れの能力に従ひ自ら突進して得た職業である。……軍艦を食つたり、鉄の下に手をやつたり、一万円とかをどうかしらしてまで、金の奴となり、人から笑はれ裁断所の厄介になるやうな、大臣華族貴人富豪などより、遙かに誇るべき楽しき意欲ある生活である。況んや、人生なるものを感得し、世を颯颯し怒々天下の推移に馳するが如きは、実に味ふべき生活ではないか。こゝに就職の意義がある。こゝに活動の意義がある。

大学を出たから車挽きになれぬといふ法則はない。法律を學んだから立ん坊になれぬといふ理窟はない。華族の子だから労働者になれぬといふ馬鹿な話はない。職業は如何なるものでも神聖である。労働は勿論神聖である。屑屑でも立ん坊でも、車力でも大道筋光でも、その職業商売に笑ふ處はない。要するに賤しとか下品だとかいふ問題は、人間に存するのである。この人間が大切なのだ、この人が大切なのだ。この人が貴ければ、職業も從つて立派になる。

以上、長々と、「藤村操」ならぬさまざまな「操」の感懐を綴ったのは、「藤村操」に假託したこれらの感懐に、時代の精神の映りをみるからにはかならない。ある者は、そこに「新しき我」の再生を夢見、ある者は、個の自由を謳い、ある者は、立身出世主義を斥け、そしてまたある者は、社会・国家への批判の矢をそこに託した。今日、文学事典・哲学思想家辞典の類が、「藤村操」の一項を立てる所以も、藤村操の華嚴投瀝に時代の精神の象徴化をよみとり、その思想文学の場に及ぼした衝迫を知るが故である。安倍能成は、「明治後半の思想」を概括した文章の中で、次のごとく記す。

橋牛の影響も手伝って、三十四五年頃から日露戦役の頃までの間は、人生問題が青年の関心事になり、所謂青年の煩悶と青年の自殺との問題が頗る教育者の頭を悩ますに至つた。その内生活に於て國家的公共的生活と離れんとし、その潔癖と感情とによつて世俗の事功と好尚とを早まんとした彼等青年にとつての人生問題は、結局自己の問題に帰して絶対的なる要求は、ハムレットの所論「生きるか死ぬるか」(to be or not to be)を問題にせざるを得なかつた。……

四

藤村操事件が、地方の庶民の間まで及ぼした波紋を、亀井勝一郎は次のように伝えている。⁽⁸⁾

私が十五六歳の頃、将米哲学でもやろうかと面黠に言つてみたところが、「藤村操のように自殺するからいかん」と一言のもとにはねつけられました。そういう記憶があります。大正十年の頃のことですが、僻地の庶民すら、哲学とは死ぬことだと信じてこんでいた証拠です。……

亀井は同じところで、藤村操が、「哲学なること」の目的は死に方を学ぶにあるということ、青春特有の性急さで端的に実証した」といい、また哲学と文学が「反逆の形式」であつたことを述べている。日露戦後の明治三十九年には、岡山の女学生松岡千代が哲学書に傾倒しての自殺と報せられ、「女藤村」と称せられた。

「煩悶宗」「華嚴宗」などの語で括られるような一般の世の冷嘲をよそに、藤村操の華嚴自死の意義をもっとも純粹に結晶化し、いわゆる「神話作用」を推進し、美化し象徴化したのは、一高を中心とした、のちのいわゆる「大正教養派」と目され、これを支えた人たちであつた。岩波茂雄は「巖頭之感」を「不朽の詩」と讃え、「私達もこの詩を読んで幾度泣かされたか知れない。今日に至るまで一字一句も忘れない」と述懐し、藤村を「自己を内観する煩悶時代」の「勇敢なる先駆者」「真面目なる犠牲者」とする。魚住折麿も、前に引いた自己の思想史を叙した文で「藤村君は至誠真摯であつたから死に、僕は真面目が足りなかつたから自殺し得なんだのだと思つた」と語り、安倍能成もまた「いつはり多き我、真摯ならざる我」を嘆じた。また姫路中学在学の和辻哲郎は「巖頭之感」によって「人生の意義についての反省」を喚び起こされた(『自叙伝の試み』)といい、飯田から上京、京北中学に通つていた同世代の日夏歌之介も、

「煩悶」は一種の流行語であつたが、流行であるといふと問はず、三十年代の一少年にとつて、真剣な問題で、従つて当時の文相ながらが、家庭と学校と警察との不行届の結果と公言するのを大人から又聞きして憤慨に勝へなかつた。従つてこのやうな痴言を嗤つて、少壮哲学者波多野精一が「真面目なるものは決して『空想に煩悶』してゐるのではない。實在に煩悶してゐるのである。個人が道真視せられることに不満足であつて、しかも個人の眞の価値を信するに至らずして煩悶」(明治三十九年十月『早稲田文学』)してゐるのであるとなした観方に心から感謝せざるを得なかつた。

と回想している。⁽¹¹⁾

前に、藤村自死の陰に失恋を想定する風説に触れたが明治三十六年八月十二日発行の湯浅観明著『人間論』(文政堂書店)の「少年哲学者」なる一節には、次の如き評言もある。

少年哲学者は何故に、『巖頭之感』を遺せしぞや。彼れは万有の真相を『不可解』と信じ、煩悶終に死を決せしに必ずや彼れの死は煩悶の爲の結果たらざる可からず、煩悶が彼れをして『死』に致さしめしに非ずや。然るに、巖頭に立つに及んで、『胸中何等の不安あるなし』と叫べり、何ぞ其の悟ることの速きや。彼れは、何故に悟りて巖頭を

下らざりしや。悲観と楽観の一致を知りて、死を怠きしぞや。吾人は彼れの心事及び行為に熟考して、多少の疑義無き能はざる者也。

道路の伝ふる処によれば、彼れが決死の動機は失恋の結果なりとなり。嗚呼、彼れが人生を悲観したるは、得して失恋の爲の故なりし乎、若しこの風説を真ならしめば、吾人は彼れを欽敬せざる可からず。彼れは「恋」を捕へんとしたるならん、「恋」を味はんとしたりしならん、あわれやな、彼は成功し能はざりき。嗚呼彼れは吾人の所謂「人間の大目的」に向つて狂奔し、終に事破れぬ、失敗しぬ、茲に於て一路「死」に向つて趨る、是れ人生の大快事也。吾人は風声鶴唳たらずして、このことの寧ろ真実ならんことを願る者也。

これは、盤上に黑白を争う時、たまたま「日露開戦の警報に接すと雖も、吾人は是れが爲めに黑白の戦争を中止せざる可し」と断言する著者の、「趣味」を「人間の生命」となし、「恋」を「人間の最大目的」となし、「死」は「人間の最大趣味」と主張する立場からの立言であつた。後年の安倍成成が「当時の世評が藤村の死の理由を失恋だとしたのに対して、我々は抗議した——公にはないが——ものである。人は失恋しなければ自殺できぬものではない、人生活の煩悶の爲にも死ぬる、というのが我々の考であり、それによつて藤村の自殺の純粋性を弁護した積りだつたのである。」と述懐しているように、藤村の華嚴自死を詩化し醇化し、自らのあるべき姿をそこに重ね合わせようとする心情が、一高を中心とした当時の知的青年たちに強くはたらいていたのである。「藤村操生存説」に表われたような、十六歳十ヶ月の青年の、大樹に「巖頭之感」を墨書しての投瀑に衝気と客氣をよみとらうとする俗解を斥け、世界苦の厭世観による哲学死として象徴化され、新時代の到来を告げる曉鐘とされた。

かくてドイツ観念論に親炙する大正教養主義の原点として藤村操をとらえる見方が定着する。

特異なプラグマチストとして知られる丘浅治郎は、ものごとを絶対化する態度への徹底的な反発によつてその生涯を貫いたが、その著『進化と人生』(明治39・6 東京開成館)の中で、「宇宙に於ける人類の価値を忘れて、實際あるよりは遙に高尚な、有力な、神聖なものである如くに思ひ込むことは、総て誇大狂の範圍に属するものと見做すべきであらう」として、「先年或る少年が宇宙の解すべからざることを苦に病んで」と藤村の華嚴自死にも言及している。丘の主張は同じ著の「芸術としての哲学」なる章名にもうかがえよう。

いわゆる「教養派思想」の原点として、藤村操の自死の意味を、もっとも高い位相でとらえようとした論に、助川徳是の「良心の實踐」(『文学』昭和54・5・10、『啄木と折原』昭和58・6 洋々社)がある。助川は『巖頭之感』が表出している「新しい感情」として冒頭部に凝縮された「コスモロジー」をあげ、この発想が「文学界派や明星派の影響、さらには、日本における宗教学の超越性……端的に言えば、内村や植村、とくに内村の宗教学」によつてもたらされたとする。次に「ホレーシヨの哲学」なる表現で問われているものが「明治的な進化思想の論理的帰結である決定論的人生観や、生物学的人間観を支えた、明治の学問すべて」であり、それが「何等のオーソリチーを備するものぞ」と断じられたのであり、ここに「現世的な栄達や名声への訣別」がマニフェストされ、「国家が青年に向かつて誘いの餌とした地位や資産もまた背を向けられた」とする。更に「万有の真相」を「不可解」と言い切ることに意味は、「近代が提出する合理的分析的理性への拒否」であり、「西欧の科学の福音への根源的な疑惑の表白」であると断ずる。

ミル、スペンサーなど経験論・実証主義・進化論に立つ思想家によつてその世界観人生観の開眼を果した長谷川如是閑は、ある心の『自叙伝』(昭和25・6 朝日新聞社)で、明治三十年代の知識青年の典型として次の三つを挙げる。

- (一)「日本の、時代の歴史に生きようとする——あるいは、封建制を清算した、近代国家の歴史に生きようとする——近代の民主的国家主義の典型に属する一群」。
- (二)「既に世界的に進行していた、資本主義末期の歴史に順応する、『政治的解放』につぐ、『社会的解放』の要求に燃えている、前者の『国家的』なのに対して、『國際的』の典型に属するそれ」。
- (三)「国家的」にも「社会的」にも「何らの積極性も行動性も」示さず、ただ個性の「無力の叛逆を煽」りつつ、「茫漠たる懐疑性に包まれて低迷する一群」。

そして「第三のカテゴリ」の青年達について如是閑は、「煩悶青年」を簡単に「読書中毒」として片づけてしまひ、「同情するよりはむしろ軽蔑」したといひ、「その憂鬱なグループは、明治の歴史が真昼の太陽のように輝いていた、日露戦役前後が、『量的にも質的にも、絶頂だったが、そこに深い意味のあることなどは、第一のカテゴリに属していた私には見てとれなかつたのだ』とし、この最後の群は、「あれども無きが如き、陰性的存在」であ

ったが、それは「時代の歴史に躍らされるにはあまりに個人的であり、内面的」であったからで、しかもその「潜勢力に於て」は、その後の「日本人の知性と感性の歴史に決定力を持つほどの優性分子を含んでいた」のであり、明治末から大正末にわたる「日本のインテリ層の近代的性格の長所も短所も、強味も弱味も、この『煩悶期』を潜って来た若い世代の人たちの責任だった」と結論づけている。一貫してドイツ観念論を嫌って生きた長谷川如是閑の晩年の反省である。

注1 島崎藤村研究誌『風雪』第九集、昭和47・2、『日本近代詩考——比較文学への試み』(昭和50・9 教育出版センター)所収。

- 2 若目田武次訳註『マンフレッド』(外国語研究社 昭和7・12)
- 3 安倍が戦後最初に触れた文『巖頭の感』をめぐって(『新潮』昭和24・9)には「四十日ほど立つて瀧壺に現れた」とある。
- 4 清原操稿『愚問悲しき人生』(大正2 岡村書店)なる著もあるが、未見。
- 5 松本克平氏から、コピーの借覧を得た。このコピーの因縁については、松本克平著『私の古木大学』(昭和56・2 青英舎)付録「青英舎通信 1」所載の谷澤永一・松本克平対談「読書人の喪喪」に詳しい。
- 6 最初に項目としてとり上げたのは、明治書院の『現代日本文学大事典』(昭和40・11、増訂縮刷版 昭和43・7)である。執筆川副国基、東京書籍『近代日本哲学思想家辞典』(昭和57・9)がこれに次ぐ。
- 7 岩波講座 日本文学『明治思想界の潮流——文芸評論を中心として』(昭和7・10 岩波書店)
- 8 久山康編『近代日本とキリスト教——明治篇』(昭和31・4 基督教徒兄弟団)
- 9 『回想二題』(『高文芸部編』『橄欖樹』所収、昭和10・2)
- 10 『藤村操君を憶ふ』(『高』校友会雑誌 第百二十八号、明治36・6)
- 11 『明治浪漫文学史』(昭和26・8 中央公論社)
- 12 『恋愛と自殺について——私も昔は自殺を思ったこともある』(『文藝春秋』昭和33・3)「私の藤村に対する感激は藤原(正)の影響も少なくなかったことは確で、彼と会う時にはいつも、藤村の死を肯定して世評を烈しく否定したものであった。」戦後の安倍は藤村の学問的「大野心を押しつぶすだけの恋愛及び失恋があったらいい」ということは、その後色々な見

聞から想定せられる」としている。

- 13 前稿で、続稿での目論見に触れたあとがきで、『衝気』と『交気』の文学的系譜にも言及しようとする」と記したが、果せなかった。「衝気と客気の文学的系譜」として、虚構を自らの生に想した太宰治・三島由紀夫・立原正秋らに触れる心積りであった。

- 14 藤井武(『旧約と新約』90号 昭和2・12) なお、成瀬無極は、次のように見る。「彼らはドンキホーテであると共に、またハムレットでもあったのだ。古い英雄主義を奉じ武士道を唱へてゐたやうに見える運動部の中にさへ多くのハムレットが潜んでゐたのである。『巖頭之感』は、その内容といひ文体といひ、如何にもあのころのハムレット的・ウェルテル的青年の面影を髣髴させる。さうして、藤村操の死は『全体か皆無か』の玉碎主義の具現であり無の哲学の予感だとも云へよう。これらの意味でこの遺文は古い型の「高青年を葬る墓銘」だとも考へられるのである。」(『第一高等学校批判』昭和25・6 『新潮』)